久保朝孝先生をお送りする

竹内瑞穂

本学国文学科教授（大学院文化創造研究科国文学専修兼担）久保朝孝先生が、定年により本年三月をもってご退職されることになりました。

先生は一九八二年四月に愛知淑徳短期大学国文学科専任講師として着任され、一九八七年四月に准教授、一九九二年に教授に昇格されています。一九九五年四月には現代社会学部教授として愛知淑徳大学へと所属を移し、のちの一九九九年四月には文学部国文学科教授となられ、現在に至っています（なお、一九九七年四月より大学院文学研究科教授、二〇一三年四月より大学院文化創造研究科教授を兼担）。ご着任以来、三九年の長きにわたってこの愛知淑徳学園に奉職されてきたことになりますが、その間には中古文学の専門家として国文学科専門科目の担当をお務めになるだけにとどまらず、一九九四年四月から二〇〇〇年三月まで愛知淑徳大学エクステンションセンター次長、二〇〇三年四月から二〇〇七年三月まで国文学科主任、二〇〇八年四月から二〇一一年三月まで情報メディアサービス部長、二〇〇八年四月から二〇一二年三月まで図書館長、二〇〇九年四月から二〇一八年三月まで文学研究科長、二〇一三年四月から二〇一五年三月まで文学部長、そして二〇一三年四月から現在に至るまで文化創造研究科長を歴任し、数々の重責を果たされてきました。なかでも、先生が研究科長でいらっしゃった時期に行われた大学院の文学研究科から文化創造研究科への改組や、図書館長でいらっ

しゃった時期に進められたリポジトリの整備などは、現在の本学の研究・教育体制の基盤を築き上げた非常に大きなお仕事であったといえます。

また、先生のご業績は学校業務のみにとどまりません。研究者としては『紫式部日記』をはじめとした日記文学を中心としつつ、平安朝文学を幅広く考究されてきました。その著作は、別掲の研究業績に示されるように多数にのぼります。斯界における研究および人物に対する評価は極めて高く、二〇一九年から現在に至るまで中古文学会の代表委員として、学会を文字通り牽引し続けていらっしゃいます。そして、その中古文学研究への情熱は、そのまま教育へも引き継がれておりました。ここ数年、私は学科の教務委員や主任として卒業論文の提出会場に詰めておりましたが、その際に先生のゼミ生たちが、困難を乗り切ったのだという自信に満ちた晴々とした顔で、美しく装丁された論文を提出していく姿を何度も見て参りました。先生のご指導が、単に知識を与えるだけでなく、人を育てるものであったことが窺われます。

最後に、少々個人的な思い出を述べさせていただきます。今年度は先生の発案による、源氏物語を専門としない研究者らによる源氏物語論集の企画にお声がけいただき、思いもかけず源氏物語の論文を寄稿させていただきました。私の論文の出来はさておき、忘れられないのが、論集の原稿が集まり始めた頃、雑談のなかで出てきた「原稿を読んでいるが、近代の人が書くものは本当に面白い」という先生のお言葉です。研究を続けていると己の領域のみに固執し、そこから出ていくことにも、逆に門外漢が入ってくることにも抵抗を覚えるようになりがちですが、先のお言葉からは先生の度量の大きさとともに、知的な試行錯誤を純粋に楽しむという研究者の原点、あるべき姿をみたように思います。

先生には、今後も「国文学概論」をご担当いただくことになっておりますので、まだまだこの国文学科とのご縁は続くことになります。お立場は変わられますが、これまで同様にご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

（文学部国文学科主任）